

W. L. JUDSON.
SHOE FASTENING.

W. L. JUDSON.
SHOE FASTENING.

No. 504,037.

Patented Aug. 29, 1893.

No. 504,037.

Patented Aug.

この特許図(US.Pat.No.504037)はシカゴのウィットコム・ジャッドソンが1893年に取得した靴用の留め具としてのファスナーである。一度の連続した動作でクラスプの別をはめたり外したりできるとあり、ファスナーの利点はなによりスピードにあった。下はサンエス商会時代の輸出用ファスナーの見本帳。1937年ころのもの。ジャッドソンの特許からは約40数年が経過し、紙の上のアイデアと実製品とは大きく進歩している。それでもなお改良すべき点はまだまだ多く残っていた。

Witnesses
J. H. Opsahl
F. E. Olson

YKK FASTENING

【YKKファスニング物語】

グレートブランド物語

Great Brand Story

第28回:文と構成 / 河村喜代子



現在は魚津市となっている土地で1908年に生まれ、20歳で東京にやってきたYKK創業者の吉田忠雄。ファスナーとのつながりは、最初に就職した中国陶器を輸入していた会社がファスナーを取り扱うようになったところから始まっている。下は創業間もないころのファスナーづくりの作業場。ファスナーが噛み合う部分の務歯(むし)と呼ぶ部品を手作業で植え付け、回転する輪が一部分見えているプレス機でテープに固定させる。これが均一にできないとスライダが動かない。



独立してYKKの前身となるサンエス商会を始めたばかりのころの社屋。場所は吉田忠雄がはじめて就職した会社があったのと同じ日本橋筋段町(かきがらちょう)にあった。あたりは隅田川がそばを流れ、江戸の時代から舟運を利用して醤油や瀬戸物を商う店が集まり蔵が立ち並ぶ土地だった。ここから国内のシェア9割強という圧倒的な数字を示すガリバー的存在へと歩き出したのである。第2次大戦をはさみ戦後の混乱がようやくおさまってから間もない1959年には、早くも視線は海外に向けられており、ニュージーランドに工場を設立している。

Photo Courtesy of YKK Fastening



スライドファスナーの原型「ザ・オリジナル」。さらに改良が加えられて1917年にはホックレスNo.4が発表された。

YKKは手作業でひとつずつむしをテープに植え付けていくところから始めて、世界のファスナー界の巨人へと成長した。

世界シェア4割強という驚異の数字をたたき出すYKKにはファスナーという道具が持つ潜在能力を信じた人物がいた。

ファスナーといえばYKK。引き手にその3文字以外のものが入っているファスナーを見つけたことの方が難しい。その会社を始めたのが吉田忠雄という人物である。富山県で1908年に生まれた吉田忠雄とファスナーとの接点は、東京で中国陶器を扱う会社に就職したところにあった。古

谷商店という輸入会社が陶器だけでなくファスナーも取り扱うことになった。だから始まったのは必然ではなく偶然だった。

1928年にはじめて東京に出てきた当時、東京は「上京」してくる場所であり、会社に勤めることは「奉公」という言葉が出る時代である。その奉公先の商店が倒産してしまい、大量に残っていたファスナーの半製品

を引き取って自分で商売をはじめたことにした。それが1934年のことであり、サンエス商会と名付けた会社後の吉田工業となつて、現在のYKKへとつながっていく。

このころでファスナーそのもののアイデアは、19世紀末からすでに複数存在していた。そこからアメリカ人のジャッドソンが考案したものが、博覧会などで注目されて頭

つ抜け出ていた。さらに改良を重ねた結果、多くの人の注目を浴びる。上の写真がそれで、ファスナーが工業製品としてつくられる原形にいたものとして「ザ・オリジナル」の名で呼ばれる。

これが1905年のことだった。そこから東京の日本橋筋段町で吉田忠雄が手にしていたファスナーまでは、ほぼ30年の隔りがある。



道具として完成度を追求し 手作業から機械化へ進む道を いち早く選択した。

71の国と地域、114社により547カ所の拠点を持つとする記録がある。これは世界で展開しているYKKの2009年末の数字である。市場占有率で見ると世界では4割以上、国内では9割以上という数字があるほどだ。たとえ引き手にYKKの文字が入っていないとしても、ほかの有名ブランドのロゴをのせていてもYKK製である可能性が圧倒的に高い。会社発足当時の状況からは、想像すらできない。日本国内でつくられたファスナーを前にYKKの人間であれば、「ほぼ弊社製です」といえる。それがけつしていい過ぎではないのだから正しい。

YKKの始まりとなったサンエス商会が発足した当初は、仕入れたファスナーは、注文があったらすぐそのまま売れるというものではなかった。そもそも1934年当時のファスナー全般に対する世間の評価が低かった。まだ新奇の道具の域にあってたからだ。珍しがられるもの、道具として信頼されるにはほど遠かった。抱えていた問題の中心は具体的にはどんなものであったのか。「吉田忠雄の哲学」という冊子に、そのくだりやを伝える部分がある。

「ダメ製品には3つの原因があった。1番目の原因は、テープ地がテープ専用として織られていないため、波をつた状態であったり、テープが伸び縮みしやすいものであったこと。2番目は、信じられないことだがテープに植え付けられた籬歯（ムシ）噛み合う部分の大きさが不揃いであったこと。

2009年に発売されたアーリーデイズ。これまで実用一直線だったファスナーが表現力を備えファスナーの可能性を広げた。



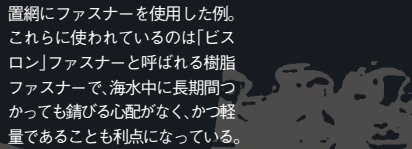
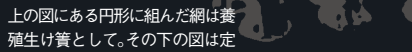
アーリーデイズに使われるむしはプレスで仕上げている。初期のファスナーに使われていたクラスプを連想させる。

3番目は、ムシがしっかりとテープに固定されていないためグラグラして、ムシを包みこんで走る開閉用のスライダーがスムーズに稼働しないこと。これではファスナーの土台から歯まで悪いところだらけで、「ダメ製品」という言葉が実感される。当時のモノづくりの水準ではこれを許す部分があったとしか考えられない。自分で会社を興した吉田忠雄は、これを許さなかった。また道具として、新奇の部類に属するという部分にも寄りかからなかった。部品を取り替え、手直しをして、使える道具にしてから出荷した。それを全部自分たちでやった。社員は自分を含めて全員で3人しかいなかったから。苦労だったろうが、自分たちが売れるモノを自分たちの手を通じて知ることにつながったはずだ。

会社は第2次大戦による解散を挟みながら、戦

アーリーデイズのデザインは1910年当時のファスナーでタウジーッパーと呼ばれていたモデルを基にしている。YKKのプロジェクチームはそれを道具への要求水準が高い現代に通用するものとして完成させた。

上の図にある円形に組んだ網は養殖生け簀として。その下の図は定置網にファスナーを使用した例。これらに使われているのは「ビスロン」ファスナーと呼ばれる樹脂ファスナーで、海水中に長期間つかっても錆びる心配がなく、かつ軽量であることも利点になっている。



後に復活する。今度はアメリカ製のファスナーを直接目にして、完成度の違いにたじろぐことになった。アメリカは機械で均一にむしを植え付けているのに対して、日本ではまだ手作業の域にあってたことが原因だった。機械に対抗するには、機械化しか道はない。その判断は正しかったが、アメリカからすぐに機械を輸入することはできなかった。あまりに高額だった。単独では不可能と判断したが、参加しようという者は現れなかった。第2次大戦が終わってからもまだ間もない時代では、無謀な賭けと受け止められても仕方ない。当時

工事現場や厳しい環境下などファスナーは目立たない場所でも利用される道を拓き実績を刻む。通す意志がなかったら、今日のファスナーのガリバー企業は存在していない。目指すクオリティを表現するために、やがてYKKはテープ製造に関する織物工場からむしを植え付けるチェーンマシンまで自社で製造する道を進む。

着脱の容易さを実現して、スピードがファスナーの最高の力になってきた。レザージャケットやフックウエアなどのそれぞれの会社が、ファスナーを導入したのは「うちが最初だ」と一番乗りを自慢している。アメリカ軍もファスナーの有用性を放っておかなかった。陸軍航空隊の飛行士たちが着たボタン留めのフライトジャケットA-1は、1931年にはファスナーが採用されてA-2になった。その時以来、レザージャケットの傑作品



金属ファスナーの「ルミナ」。エレメント部にアルミ合金を使用する。金属の特性を活かすと同時にパープル、オレンジとカラフルなバリエーションがそろう。多色づかいのミックスは単に留め具だけにとどまらずファスナーの応用範囲を広げた。

Photo/Takenori Aoki (WPP)

楽しむためのアウトドアから本格の登山そして究極の地である宇宙まで、ファスナーの確実な機能が求められる場。

最近ではアウトドア用のジャケットなどに、止水ファスナーと呼ばれるものが使われているのを目にする。テープを貼ったかのようなテラ感があるのが特徴だ。ファスナーの存在自体が注目の的で、デザイン面でもそれをアピールできるように工夫されている。



先頭車両がロングノーズとなったスタイリッシュな姿の新幹線のぞみ500系の車両内の日よけにYKKのファスナーが使われてきている。この500系車両は惜しまれつつ東海道路線からは2009年2月末で引退している。

ファスナーが水や風に対して密である性能を持たせることを最初に考えたのはイギリスだった。1954年のことでありすでに半世紀以上経つ。当初はコストが高かった。



世界最長の吊り橋、明石海峡大橋の排水溝という意外な場所で使われている。排水溝は伸び縮みできるゴム製で必要に応じて掃除する。ファスナーを開ければゴミを簡単に片付けられる。
Photo/Honshu-Shikoku Bridge Expressway Company



STS-131への搭乗が決まっているミッションスペシャリストの山崎直子宇宙飛行士が着用しているのは打ち上げと大気圏再突入時用のオレンジ色の飛行服。ここにNASAの厳しい品質管理に合格したYKKの気密ファスナー、「プロシール」が使われている。
Photo/NASA

身近なモノが意外な場所で働いている。実力を基に可能性を広げる。道具がおもしろい理由はそこにある。



ト、バックパックなどに使われている。「アクアガード」ではファスナーの裏側にポリウレタンフィルムをラミネートしてある。この最大の利点は、雨からファスナーをガードするために付けられているフラップを不要にした点だ。さらに厳しいスペースが求められる場にはプロシールがある。こちらは本格的な水密、気密ファスナーだ。NASAのスペースシャトル打ち上げ時に宇宙飛行士たちはオレンジ色の飛行服を着るが、これに使われている。宇宙飛行士が着用する装備は、アシスタントがつくほど着脱したいへん手間がかかるが、もし

もファスナーが使えなければさらに困ったことになったのはまちがいない。同時にスペースシャトル船内に持ち込むすべてのアイテムにはNASAの厳格な規格が設けられている。水密で気密という本来の役割以外にも難燃性であることや有害なガスを発生しない素材であることなど求められるスペックがあつて、これに合格していることは大きい。ファスナーの始まりは簡単に開閉するところにあつたが、現在は開めることとなったら密に閉めることができる。曲げや伸びなどの動きにも対応できる。確実性と柔軟性を同時に満たせる開閉具はそうそうない。明石海峡大橋で使われている例など、これからも意外な場所でファスナーが働く予感が濃厚だ。ファスナーはそんな要求に応える可能性を備えている。

左はイーゼトラックの操作図。これまで縦方向からのみだったスライダーへの差し込みを横方向からの差し込みも可能にした。右はストレッチファスナー。縦方向に10%ストレッチ可能。伸縮性に富んだニットやスポーツウェアなどに最適。

